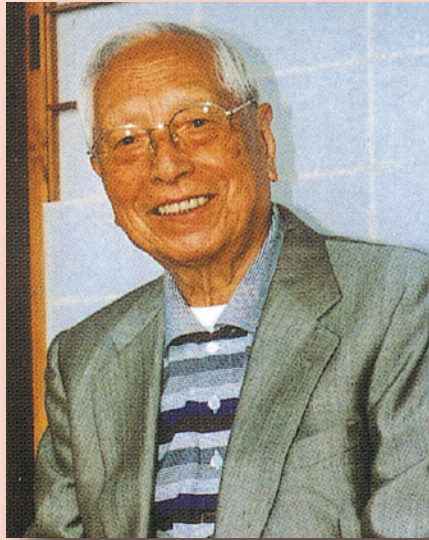




# 和田 健

山口市  
(1915～2013)



撮影・下村鳴川（平成11年10月11日 其中庵にて）

## 【著作】

評伝『氏原大作伝』（昭和44・氏原大作顕彰会）  
詩集『瀬のある風景』（昭和60・こだま詩社）  
解説『山頭火よもやま話』（平成13・私家版）

ほか

## 【関連情報】

〔共 著〕『ふるさと紀行』、『山口吉敷歴史物語』、  
『山口県近代文学年表』、『仁保の郷土史』  
〔その他〕校歌、町歌、音頭、園歌、小・中・高の  
課題曲の作詞等。

詩集『へその耳』には、和田健の詩の特徴がよく現れている。目に見えるものや行いが、隣の人に話しかけることばで、分かりやすく表現されている。それによって、作者の中に秘められているものが、ことばの意味を超えて、知らず知らずのうちに読者の心を揺り動かしている。時流に迷わされず、七十年以上にわたって自分の道を求め続けた人の、詩の力である。

この作品が収められている『へその耳』は、和田健の詩の集大成と言ってよい詩集で、作者が亡くなる年の約十年前、二〇〇二年に刊行された。題名にされた詩の最終部を引用する。

### へその耳

（前略）  
赤ちゃんは  
お腹の海の中で  
お母さんのへその耳から  
この世の音を  
聴いているかも



詩集『へその耳』

胎児の生き方を女性に質問することから始まって、「へその耳」に至る。胎内にある「へその緒」に対する好奇心と「へその耳」が外界に向ける好奇心とが重なって、生命の瑞々しさが伝わり、この詩集の名にふさわしい。

他人の詩や、詩の団体の活動に対しても、個性や作風の違いを超えて、理解の努力を惜しまない。いろいろな機会に、詩に関心のある人々を、暖かく、厳しく指導して、有望な作者を育てた。一九六四年に結成し、約三十年間代表を務めた山口県詩人懇話会は、今も毎年、『現代山口県詩選』を発行している。

現代詩の分野を離れても、自由律俳句の種田山頭火、小説の氏原大作等、郷土の文学者の研究を幅広く行っている。山口県の文化の歴史には、つきりと足跡を残した一人である。

その活動の原動力の一つは、年齢を重ねても衰えることのない好奇心であったと思う。

（文・陶山祐二）



2004年11月27日（長門峡にて） 撮影・大来静枝



一和田が朝の客人である鳥たちを待つ  
自宅近くの樅野川べり